『伝えたい想い』～友喜のストーリー～

masa

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
『伝えたい想い』～友喜のストーリー～

【Ｎコード】
Ｎ４７４８Ｄ

【作者名】
ｍａｓａ

【あらすじ】
『伝えたい想い』は、『あたりまえの日常』の、友喜のサイドストーリーです。『あたりまえの日常』を読んだ後に、『伝えたい想い』を読まれることを、お勧めいたします。『あたりまえの日常』ｈｔｔｐ：／／ｎｃｏｄｅ．ｓｙｏｓｅｔｕ．ｃｏｍ／ｎ４２６２ｄ／

プロローグ（前書き）

この話は、『あたりまえの日常』の、友喜サイドの話です。
先に、『あたりまえの日常』ｈｔｔｐ：／／ｎｃｏｄｅ．ｓｙｏｓｅｔｕ．ｃｏｍ／ｎ４２６２ｄ／を、読まれてから、『伝えたい想い』を読まれることをお勧めいたします。

プロローグ

俺は昔からずっと絵を描いていた。
母から教わった絵を。
母が買ってくれた、この水彩画の道具で。

俺はずっと母が好きだった。いつも笑顔の母が好きだった。
そんな母が、実家へと帰ったのは俺が１４歳、中学2年生の時だった。

俺は親父が大嫌いだ。
母をあんなにしてしまった。親父が大嫌いだ。

だから俺は、親父の苗字である、”藤代（ふじしろ）”が嫌いだった。
初めて会う人にも、”友喜（ともき）”と呼ばせていた。

俺には、無二のマブがいた。
横田実（よこた みのる）だ。
こいつとは小さい頃からの付き合いで、いつも一緒に遊んでいた。
何をするにも、一緒だった。
実が『私立都西高校』に行くと言った時は驚いた。
そこは、俺がずっと行きたかった高校だったからだ。
実は頭が良かった。だから、もっと良い学校へ行けたと思う。
それでもあいつは、笑顔で『私立都西高校』に行くよ。って言ってくれた。
その時の喜びを俺は忘れない。
俺が、『私立都西高校』を選んだ理由は、美術部の評判が良かったからである。

俺はずっと、実に助けられて生きてきたと思う。
泣きたい時は、いつもそばにいてくれた。
笑いたいときも、いつも隣に実がいた。

実には、中学の時からずっと彼女がいた。
その彼女の名は、白石逸美（しらいし いつみ）。
とても仲が良かった。

いっちゃん（逸美）は、目立つこと無く、静かで、おとなしい子だった。
周りからは、影の薄い子なんて呼ばれていた。

そんな2人を引き裂く事件が起きた。

いっちゃんの事故死。

それを境に、実は学校へ来なくなった。

そんな実を、”助けてやらなくては。”
と、そう思ったんだ。

1　日課（前書き）

第1部から読まれるかたもいらっしゃると思いますので、ここにも一応書いておきます。

この話は、『あたりまえの日常』の、友喜サイドの話です。
先に、『あたりまえの日常』ｈｔｔｐ：／／ｎｃｏｄｅ．ｓｙｏｓｅｔｕ．ｃｏｍ／ｎ４２６２ｄ／を、読まれてから、『伝えたい想い』を読まれることをお勧めいたします。

1　日課

「どういうことだ！！藤代！！」

職員室の中に、怒鳴り声が響いた。

一気に友喜の元へと、先生達の目線が集まったが、友喜は続けた。

「俺にはやらなきゃいけない事が出来たんだ。絵なら時間があれば、部活じゃなくても描ける。」

そう。友喜は部活を辞めるために、顧問の先生を訪れて職員室に来ていた。

「しかし、藤代。よく考えろ。お前の実力なら、勉強さえ続ければきっと……」

「だから、言っただろう。俺にはやらなきゃいけないことが出来たんだ。」

先生の言葉を遮って、友喜は言い放った。

「もういい！！勝手にしろ！！後悔してもしらんぞ！！」

もう一度、先生は怒鳴った。

「……それでは。」

そう言って、友喜は職員室を後にした。

職員室を出て、友喜はつぶやいた。
”先生……。すいませんでした。ありがとうございました。”
そして友喜は、教室へと戻った。
学校は今、昼休みだった。

そして、教室へと戻った友喜はある席へと向かった。
その席に着いて、そっと机に手を当てて、
”絶対俺が、お前を助けてやるから。”
と、強く思った。

その日の放課後、友喜は家のそばの川原へと行った。
そこで、水彩画のセットを出し、
「今日からはここが、俺のアトリエだ。」
と、一人つぶやいた。
そして、一人もくもくと絵を書き始めた。

次の日の朝、友喜は朝早く目覚めた。
「……これも習慣か。」
いつもの友喜には、この時間で間違いは無かった。
友喜の学校の美術部には、朝練があったからだ。
「まぁいい。どうせ俺はあいつの家に行かなきゃならない。」

そう言って、朝の準備を始めた。
準備を済ませた友喜は、早々と家を出た。
そして、学校ではなく、ある家へと自転車で向かった。
友喜の自転車は一風変わっていた。
レトロ風自転車と言うべきだろうか。
一目で”友喜の自転車”と分かる感じだった。

友喜は目的地に着いた。それは、みのるの家だった。
そして、家のチャイムを鳴らした。
玄関から、みのるの母が出てきた。
「あら。友喜くん。こんな朝からどうしたの??」
みのるの母は不思議そうに言った。
「あいつを…実を迎えにきました。」
「あら。……ありがとう。どうぞ、上がって。」
「すいません。」
そう言って、友喜は2階のみのるの部屋へ行った。
そして、部屋のドアをノックした。
「実??俺だ。友喜だ。入るぞ??」

「……来ないでくれ。」

「……わかった。じゃあここでいい。」
そう言って友喜は、ドアを背にその場へ座った。

「……。」
みのるは沈黙していた。

「なぁ。もう一週間経つな。」
みのるからの返事はなかった。
そのまま、一人で友喜は続けた。

「あ、そうだ。俺、絵を書いて来たんだ。ドアの下から入れるから、良かったら見てくれ。」

「俺はここからの眺めが好きでな、お前覚えてるか??ここは、俺らがずっと一緒に遊んでた場所だぞ。」

「今でも俺は、あそこが大好きだ。実際他のだれも入れたくねぇって感じ。あはは。」

「まぁ川だから、そんな事も言えないんだけどね。」

「あっ。俺、こないだあいつ見たよ。えっと誰だっけ……ほら。中学の時のさぁ……担任。」

「えっとぉ……。あぁ!!前田!!そうそう。前田前田。あいつは、相変わらず……」
友喜の言葉を遮って、みのるが口を開いた。

「帰ってくれ！！もう……帰ってくれよ。」

「……わかった。また、明日来る。」

そう言って、友喜は家を後にした。

そこから学校までは結構あった。

学校へ着く頃には、ホームルームは始まっていた。

「……この静まった中に入るのか……。」

友喜はドアの外から、教室を覗きながら言った。

「……でも入らないと。ええい。」

意を決して、友喜は教室へと入った。

”がらがらがら”

ドアは、音を立てて開いた。

一気に、友喜は注目の的になった。

”やばい……。これはやばい。緊張する……。”

友喜は固まっていた。

「藤代。珍しいな。遅刻か。」

担任の五十嵐が、友喜を見て言った。

「そうだ。」

”しまった！！俺……なんて偉そうなんだ！！”

「そうだってなあ。まあいいわ。席に着きなさい。」

「……はい。」

そして、友喜は席に着いた。
席に着いた友喜は思った。

”実！！早く来れるようになれ！！これを毎朝はきついぞ！！”

しかし、そんな想いとは裏腹にそんな生活は毎日続いた。
先生達の中では、『藤代は部活を辞めてダメになった。』と、言うものが増えていった。

2　出会い

放課後絵を描き、それを持ってみのるを朝迎えに行く生活。が1ヶ月続いた。
毎朝、毎朝みのるは”帰ってくれ”と友喜に言った。
その日の朝も、もちろん友喜はみのるの家へと向かった。
「おはよう実。」
「おはよう。」
「今日は、1年生が終わる日だ。」
「そうみたいだね。」
「どうだ？最後の日くらいこないか？？」
「すまない。行けないんだ。」
「……やっぱり、思い出すのか？？」
「……そうだ。でも、きっと俺にも遅かれ早かれ行ける日がくるよ。」
「そうか。その日が早かったらいいな。」
「うん。すまない。」

そして、そのまま家を出た友喜は学校へ行き、終業式を済ませた。
家に帰る時、友喜の家の隣が騒々しいことに気付いた。
”誰か引越してくるのか。”
友喜の見つめる先には、大きな”白猫引越しセンター”と書かれた、大きなトラックが止まっていた。
その中から、家の中へと荷物が運ばれて行っていた。
”隣はずっと空き家だったな。”
そう思いながら一時、家の前からその作業を見学していた。
するとトラックの陰から、なにやら女の子が出てきた。
とても友喜好みだった。
友喜は無意識で、サッと自分の家の中へと隠れた。
玄関に入って、
”……やばい。本当に好みだ……。”
肩で息をしながら、そう思っていた。

学校は終業式を迎えたため、春休みに入った。
友喜は、絵を描くことに集中した。

もちろん、みのるに見せるためだ。
”この絵で、実を元気にさせるんだ。”
そう思って日々書き続けた。

同時に友喜は、”隣に越してきたあの子”の事をずっと考えていた。
”同い年くらいに見えたな……。”
”学校はどこなんだろう……。”
”彼氏はいるんだろうか……。”
そんなことを、ずっと考えていた。

今までは、部活で絵の具は寄付されていた。
友喜は部活を辞める前の日に、ありったけの絵の具を学校から持って帰っていた。
しかし、その絵の具がとうとう尽きてしまった。

”こりゃいよいよ買わなきゃな。”

そして、実費で絵の具を買い始めた。
友喜には、”行きつけの店”があった。
友喜の家の前の道、川沿いにまっすぐ行った所に、『イマガワ画材屋』というところがある。
次からは、ここが絵の具の調達場所となった。

そして春休みが終わり、新学期が始まろうとしていた。

始業式の日の朝、いつものようにみのるの家へ向かった。

「おはよう。実、今日は学校へ来ないか??」

「おはよう。いや……まだかかりそうだ。」

「忘れるまでってことか??」

「……そうだよ。」

「そうか。でも、今日は始業式だ。学校へ行くチャンスだと思うが?」

「……分かってるよ。」

「それでも無理なのか??」

「……。」

みのるは沈黙した。

友喜は、痺れを切らして部屋に押し入ってみのるを連れ出さそうとした。

”ガチャ!!!!”

大きな音を立て、ドアを開いた。

そこにはみのるの姿があった。

すると、みのるはかなり驚いた様な顔をした。

「来るな!!!!」

そういって、みのるはドアを閉じようとした。

その時、鈍い音を立てながら友喜の左手がドアに挟まってしまった。

「いって!!」

友喜はその左手をドアから引き出し、痛みにもだえた。
「すまない！！大丈夫か友喜！！」
ドア越しにみのるは叫んだ。
「……だい……じょうぶだ。……すまない。」
痛みに耐えながら、友喜は言った。
「いや、謝るのは俺だ！！ごめん。本当にごめん！！」
「そんなに謝るなよ。ちょっと痛いが、左手だ。絵は描ける。」
「……すまない……。」
「気にするなって。おっと。そろそろ時間だ。行ってくるよ。」
「ああ……。」
友喜はその足で、近くの病院へと向かった。
診断の結果、指2本が脱臼していた。
その場で、骨をはめられる事となった。
そして処置が終わり、包帯をした手で学校へと向かった。
”今日はいつもより早く出たのに、遅刻だな。”
と、思いながら学校へと向かった。

教室の前へと着いた。
もう始業式は終わっており、皆教室にいた。
入ろうとしたら、なにやら騒がしい。
教室の前のドアが少し開いていたので、そこから中の様子を覗くことにした。
そこには、一人の女の子が立っていた。
”あれ??どこかで見たような……。あ!!隣に越して来た子だ!!”
友喜は一人で驚いた。

「ど……どうも。はじめまして。近藤千夏(こんどうちか)っていいます。よろしく……お願いします。」

どうやら、自己紹介をしている様だった。
”近藤千夏って言うのか。……っていうか、入れない。”
その後一時経って、千夏が席へと着いた。
そして、五十嵐が出席を取り始めそうな仕草を見せた。
”やばい!!入らなきゃ!!”
そう思い、一気に前の扉を開けた。
”ガラガラガラ”

一気に、注目の的になった。

「どうも。」

”またこれか……。勘弁してくれ。うわあ。千夏ちゃんも見てる……。”

そう思っていたら、五十嵐が話しかけてきた。

「どうもじゃないぞ！遅いぞ！遅刻だぞ！」

五十嵐は、”またか”という感じで、呆れた様に言った。

友喜はチラッと腕時計を見て、

「どうやらその様だな。」

と、言った。

”違う！！今日は病院へ行ってて遅れたんだ！！”

そう思ったが、言えなかった。

「なんで君はいつも、そう偉そうなのかねえ……。。。って。指、怪我してんじゃない。どうしたの？」

五十嵐は、指の怪我に気付き友喜に言った。

”しまった。何て言い訳しよう……。えっと、普通こういう時漫画では……。階段だ！！”

「もちろん、階段で転んだんだ。」

と、言い放った。

五十嵐は呆れた様子で、
「もちろんってあのなぁ……。。。まぁいいわ。とりあえず座りなさい。」
と言い、友喜を席へと促した。

「うい。」
”……これでいいんだ。”

そう思いながら、席へと着いた。

そして五十嵐が出て行った後、友喜は千夏にコンタクトを取りに行こうとした。
しかしそれよりも早く、美香(みか)に千夏を取られてしまった。

そして瞬く間に、女の子に囲まれていた。
入る隙間が無くなってしまった。
仕方なく、コンタクトを取るのを諦めた。

しかし耳だけは、しっかりと千夏の元へと行った。

「えっとぉ……元は福岡に住んでたよ。……」
千夏が女の子の軍団に答えていた。
その言葉を友喜は聞き逃さなかった。

”福岡?!俺の行きたい所じゃねえか。”

そう友喜は思った。

”明日だ。明日話掛けよう。”

その想いを胸に、その日の学校は終わった。

3　コンタクト

その日の朝も、もちろん友喜はみのるの家へ向かった。
そして友喜は嬉しそうに話した。

「おはよう実！！ちょっと聞いてくれよ！！」

「なんだよ朝っぱらから。騒々しいな。」

「こないだ、隣に俺好みの子が越してきたんだ。」

「それはよかったな。」

「驚いたのはそこじゃない！！その子が、うちの学校に転校してきたんだ！！」

「へえ。それは良かったな。」

「それもだ！！同じクラスだぞ！！」

「へえ。それで、もう話したのか？？」

「いや、まだだ。今日の放課後に話しかけようと思ってる。」

「待ち伏せでもするつもりか？？」

「そうだが？？」

「お前……。まあいいや。変体と間違われないようにな。」

「どういう意味だよ。」

「そのままの意味だよ。あはは。」
みのるは、笑いながら言った。

「あっ。もうこんな時間だ。俺はもう学校へ行ってくる。」

「わかった。」

「やはり来ないのか??」

「ああ。まだだ。」

「わかった。」

そう言って、友喜は家を出た。

その日も、遅刻をして学校へ着いた。
そしていつもの様に、適当に理由を付けて、遅刻をごまかした。

その日の放課後、友喜は素早く教室を出た。
そして校門の前で千夏を待ち伏せることにした。

〃やばい……。話し掛ける口実を考えてなかった。〃
〃もうすぐ来ちゃうよ。えっと……。えーっと……。ジュース!!
ジュースを奢ろう!!〃

そう考えた友喜はすぐに財布を取り出した。
財布の中身を見たら、今日買うはずの、絵の具代しか入っていなかった。

〝やばい！！他の口実……他の口実……。〟

友喜が焦っていると、無常にも千夏が来てしまった。

〝やばい！！とりあえず、話し掛けなきゃ！！何て呼べばいい？！
近藤さん？？千夏ちゃん？？
千夏？？転校生？？ああもう、何でもいいや！！〟

「おい転校生。」

友喜が選んだのは、〝転校生〟だった。

〝俺はどれだけ偉そうなんだ！！俺の馬鹿！！〟

「な……なんですか？？」

〝ほらみろ。ちょっと警戒してるじゃないか。と……とりあえず自己紹介だ。〟

「俺は友喜。友喜って呼んでくれ。」

〝呼んでくださいにすれば良かった……。〟

「え……あ……はい。アタシは近藤千夏です。よろしくお願いします。」

”話……話だ！！えっとぉ……。”

そんな事を考えながら、ポケットの中に手を突っ込んだ。

何かがあった。

”ああもう。しかたない、これを渡そう！！”

そして、それを千夏に渡しながら言った。

「これでジュース買ってきてくれないか？」

手渡しのは、自転車の鍵だった。

”よりによって、自転車の鍵かよ！！ああくそう。とりあえずチャリだ。”

「チャリはそこにあっから。」

と、言いながら1台の自転車を指差した。

”これで俺は、ジュースを買いに行かせるのか？！冗談だろ。俺。

自動販売機はすぐそこだぞ。”

飲みの物自動販売機は、2人のいる場所から歩いても1分かからない所にあった。

「え？」

千夏は、どういう事かわからないといった表情をした。

「いや、だからジュース。もちろん千夏の分も買っていいから。」

”……俺のお金ではないですけど。ああ！！しまった！！名前で呼んでしまった！！”
友喜は、一人焦った。
「何で私が買ってこなきゃいけないんですか？」
千夏は、友喜に言った。
”ごもっともです。しかし、もう引き下がれない。すまん。”
「硬いこと言うなよ。ほら。頼んだぞ。」
そして、しぶしぶ千夏はジュースを買いに言った。
”ああ。もう終わったかもしれないな。ってか、名前で呼んでも、別に何も反応なかったな。
このまま名前で呼んでみよう。……大丈夫だよな？？”
友喜は、自問自答をした。
買って、帰ってくる千夏を見ながら友喜は思った。
”そりゃ歩いて帰ってくるよな。ごめんよ。”
「はい。」
「おう。」”ありがとうございます。すいません。”
心では言えたが、言葉には出来なかった。
”そうだ！！聞きたかった事を聞こう！！”
「千夏は、福岡から来たんだろ？」

友喜は質問をしたが、その返事は返ってこなかった。
”やばい……。思い出したくない過去でもあったか??やばい……。
”
友喜はおそるおそる聞いた。
「どうした??」
すると、返事が返ってきた。
「え。あ。いや。なんでもないです。はい。福岡から来ました。」
”よかった返事が返ってきた。でももう少しだけ福岡の事が聞きたい。”
そう思い、更に問いかけた。
「そうか。福岡ってどういうとこ?いいとこ?」
「はい。いい所ですよ。」
「そうかそうか。」
”いい所か。……聞いても大丈夫そうだな。”
「何でこっちに来たんだ?答えにくかったら答えなくていい。」
「別に特別な理由じゃないです。親の転勤でこっちに来ました。」
”何だ……。結構普通だな。”

「そうか。じゃあ今親元から通ってんのか。」
”知ってるけど。”
「はい。」
「そうか。」
「はい。」
「家は近いのか？」
”俺の家の隣だが。”
「そこそこ。」
「そうか。俺の家も近くだ。兄弟は？」
”確かいなかったよな。”
「いません。」
”そうだよな。”
そんな会話を淡々と済ませ、ジュースを飲み干した。
”やっべ。奢ってもらった礼を言わなきゃ。財布は……無くしたことにしよう。”
「これご馳走さま。俺、財布無くしてさ。金がなかったんだ。今度借りを返す。」
「いえ。結構です。それでは。」

そう言って、千夏は逃げるように離れて行った。

”ああ。これ嫌われたな。どうしよう。”

友喜は、一人落ち込んだ。

こうしてファーストコンタクトは、終わった。

4　財布

それから1ヶ月過ぎた。友喜はずっと思っていた。
”あの日……大失敗のファーストコンタクトの日から、完璧に無視されてるな。”
そう。あの日から、ずっと友喜は千夏から敬遠されている感じだった。
”久しぶりの、一目惚れも儚く散ったな。”
そう思っていた。その事は、みのるにも告げていた。
みのるは、『あはは。残念だったな。また機会があるよ。』と、笑いながら慰めた。

いつも友喜は、学校が終わればすぐさま教室を後にした。
千夏も教室を出ていた。
なので、自転車置き場で友喜が自転車の鍵を空けている途中に、千夏が歩いて抜いて行く。
そしてその千夏を、友喜は自転車で抜いて行く。
それが友喜にとって、唯一一番千夏に近づける時だった。
友喜は、いつもの様に川原で絵を描いていた。
するといきなり、後ろの方から声が聞こえた。
「あの。藤代くん。」

「ん？」
誰かと想い、後ろを振り向いた。
そこに立っていたのは、千夏だった。
「ちょ！うお！！何してんだよ！！」
”絵を！！絵を隠さなきゃ！！”
「いや。あの。財布。落ちてましたよ。」
”え？？どこで落としたんだろ。ってか、中身見られてたら終わりだ。”
「無くしたって言ってたやつじゃない？学生証が入ってたよ。」
”無くしてた？？あら？？気付いてないのか？？”
「あ……ありがとな。」
と、受け取りながら言った。
その後千夏と絵の話になり、それが美術部の時の先生に知れたら困るので、誰にも言わないでくれと口止めした。
そして、千夏は去って行った。
急な展開に、友喜は驚いた。
”普通に……話したぞ。”
”でも、もうこれ以上何もなさそうだがな。”
そう思っていた。

数日後、いつもの様にみのるの家へ向かおうと家を出た。
その時、千夏の家の方から物音がした。
音のした方へ目をやると、そこにいたのは千夏だった。
”学校へ行くには早すぎるだろ。何してんだ??”
と、思った時千夏と目があってしまった。
”話……掛けた方がいいよな。家が隣だったのは知らない設定にしよう。”
「まさか隣だったとはな。」
「そうだね。びっくりしたよ。」
「今日は早く学校に行く日か?」
「そんな日はないでしょ。いつもより早く起きれたから、その分早くいくだけ。」
「そうか。じゃあな。」
「じゃあなって。どこ行くのよ。藤代くんもたまたま早起きできたなら、遅刻せずに学校来ればいいじゃない。」
「俺は遅刻しないと、一日が始まらないんだよ。」
”実の家に行かなきゃならないんだよ。”
「なにそれ。」
「気にするな。じゃあな。」

千夏と別れた後、友喜は一人幸せな気分に浸っていた。
”今日は良い事があるぞ！！”
と、浮かれ気分でみのるの家へと向かった。
友喜はみのるの家へ着いて、その事を報告し始めた。
「おい実！！今日朝から千夏に会ったぞ！！」
「おはよう。そうなんだ。良かったじゃない。」
「おうおう。今日は絶対良い事あるよ。」
「かもな。」
「それよりさ……。」
そう言って、ドアの隙間からみのるが何かを出してきた。
それは、何かが書かれた紙だった。
内容を見てみると、そこには『最近、何か変わったことなかったか？？』
と、書かれていた。
「最近変わったこと？？」
と言うと、みのるは慌てた様子で言った。
「ば……馬鹿！！」

「え？？何？？」

「いや、何でもない。忘れてくれ。」

「お……おう。」

そんな感じで、その日はみのるの家を後にした。

その次の日にみのるの家に行っても、昨日の手紙のような事は無く、いつものみのるだった。

5　自己紹介

その日の学校も終わり、友喜がいつもの様に絵を書いていた。
すると、また後ろからいきなり話しかけられた。

「また今日も描いてるの？」

驚いた友喜は、”この声は……。”と思いながら振り向いた。
「んおぉ！！」
案の定千夏だった。
”変な声を出してしまった。”
少し赤面してしまった。

「いいじゃん隠さなくても。ってかもう見たよ。」

”隠したんじゃない。驚いたんだ。”
「勝手にみんなよ！」

「アタシに気付かない藤代くんがわるい。」

”ごもっともです。ってか、藤代っていうのが気にかかる。”
「うるさいなぁ。つか、友喜って呼べっつったろ。」

「あぁ。なんか言ってたね。忘れてた。」

「忘れてんじゃねぇよ。藤代って呼ばれるの好きじゃねぇんだよ。」

「なんで？」

「いいだろ何でも。」

「秘密が多い人だなぁ。」

「ほっとけよ。とりあえず、友喜と呼べ。」

「わかった。」

「よし。」

「友喜は何で絵を描いてるの？」

”待っている人がいるから。それに、ここで書いてたらまた千夏と話せるかもしれないから。なんちって。”

「何ででもいいだろ。」

「また秘密っすか。」

「そうだ。」

「友喜、けちっすね。」

「うるさい。」

「あ。アタシおつかい頼まれてるんだった。行かなきゃ。」

”なんだよ……。もう行くのかよ。”

「おう。行って来い。じゃあな。」

「うん。じゃあね。」

そう言って、千夏はその場を後にした。
そして友喜は、
”ここで絵を書いてて良かった。”
と、心から思っていた。

次の日、いつもの様にみのるの家に行こうとしていた。
すると、そこにはまた千夏が立っていた。

「あら。おはよう。」
驚くことに、千夏の方から話しかけてきた。
”話掛けられたよ！！”と驚きながら、
「おう。おはよ。」
と、答えた。

「もしかして、いつもこんなに早いの？」
”そうです。”
「違うよ。」
「……ほんとぉ？？？」
”嘘です。”
「違うっつってんだろ。たまたまが２回続いたんだよ。」

「へぇ。あ、ねぇ？」

「なんだよ。」

「今日、どこに行くか着いて行っていい？？」

”何をいきなり言い出すんだよ。”

「ダメだよ。来るな。」

「いいじゃん。友喜は不思議に包まれてるし、秘密多いし。少しでも解明しなきゃ。」

「ダメだ。来るな。」

「ダメって言われても、着いて行くもん。」

”一緒にいれるのか……。まあそれは嬉しいが……。”

「……勝手にしろ。」

”勝手にしろって言っちゃった。”

そして、友喜は自転車で走り出した。

それに着いて来るように、千夏は走りだした。

友喜は、途中途中でわざとスピードを落とし、千夏が見失ってしまわぬ様にゆっくりと行った。

そしてみのるの家に着き、いつもの様にチャイムを鳴らした。

”絶対みのるのおばちゃん不思議に思うだろうな。”

一時経って、みのるの母が出てきた。

みのるの母は、案の定不思議な顔をした。
しかし、普通に入れてくれた。
そして、みのるの部屋の前に着いた。
「入らないの？」
と、千夏は聞いて来た。
”入ったら、今度は骨が折れるかもしれんからな。”
と思いながら、
「ここでいいんだ。」
と、答えドアをノックした。
そこで、絵についての話をし、いつもの様に学校に誘うような会話をした。
”みのる！！今ここに、例の転校生がいるぞ！！”
と、心の中では思っていたが、結局伝えられなかった。
みのるの家を出て、学校へ向かおうとしていたら、千夏が話しかけてきた。
「毎朝、今の説得で遅れてたの？」
「……そうだ。」
「そっか。」
「……。」
「毎日絵を描いてるのは、実くんに絵を渡すため？」

「……そうだ。」

「そっか。」

「……。」

「お金…なかったのも、絵の具のせい？」

”……やっぱバレてたのか。”

「……そうだ。」

「そ……っか。」

「……。」

「今日も遅刻だね。」

「お前もな。」

「あっ。そうだね。」

”この際だ！！もうこんなチャンスないかもしれない。引きとめよう！！”

そう思い、学校を休むことを思いついた。

「……今日はもう学校いいか！ちょっと休憩しよう！」

「え？ダメだよ！ちゃんと学校行かなきゃ。」

「いいよ一日くらい。それに千夏、朝っぱらから走って疲れたろ。」

「……うん。……まぁ。」

「ならいいじゃん！たまにはさ！な？」

「……う……うん。」

”よっしゃあ！！さて何するかな？？一応、初デートだ。”

”とりあえず川原に行こう。”

そう思い、川原へと向かった。

そこに着いてから、千夏と色々と話をした。

みのるのこと、絵のこと、千夏の友達の事。

途中、みのるの彼女の話になった。

その話が、”噂”程度の事になっていたことに、友喜は驚いた。

友喜は、この2人だけの時間に全神経を集中させた。

そして、一人幸せを感じていた。

その時、千夏がいきなり、

「あっ。ねぇねぇ。アタシにも絵、教えてよ！」

と、言い出した。

友喜はとても驚いた。

まさか、あの千夏が絵を教えてくれと言うとは思わなかったからだ。

千夏に避けられていたという事実を突きつけられ、少し凹んでいた

友喜だったが、

それを聞いてテンションが上がった。

聞けば、水彩画を書きたいという事が分かった。
出来るだけわかりやすい様に、千夏に水彩画を教えた。

そして千夏は、それを完成させて、
「出来た！」
と、言った。

”な……なんだこれは。”
「お…おう。」

「上手い？！」

”ひ……ひどすぎるくらいだ。”
「下手だ。」

「なんだよぉ。そこは冗談でも上手いって言っとけよぉ。」

「申し訳ないが、お世辞にも上手いとは言えないな。」

「ずばっと言うなぁ～。」

「お互い様だろ。」

そして、その絵を友喜は眺めていた。

すると千夏が、
「あっ。明日もまた、アタシ付いていく！！実くんの家に！！」
と、言い出した。

かなり驚いた。
昨日まで友喜を避けていた千夏が、いきなりこんな事を言い出すからだ。
その時には、もう完璧に友喜は千夏に惚れ込んでいた。
そして、千夏は行くと言って聞かず、明日も付いてくる事となった。
更に千夏は、１５分早く起きる事を条件に出してきた。
友喜が遅刻しないようにと、気を使ってくれたのだろう。

明日みのるの家に行って、みのるに千夏を紹介することになった。

次の日、友喜は千夏を連れ、いつもより１５分早くみのるの家へと向かった。

「実。おはよう。」

「ああ。おはよう。どうしたの今日は。いつもより少し早いね。」

「ああ。そうなんだ。」

千夏が、早く紹介してよと言わんばかりに、腕でツンツンと友喜の肩をノックした。

「ああ。わかったよ。」
そう、千夏に小声で答えて、友喜は千夏を紹介し始めた。

「実??今日実は、一人お客様が来てるんだ。」

「え??誰??」

「ほら。」
そう言って、友喜は千夏に目をやった。

「あの……。初めまして!!近藤千夏っていいます。えっと……友喜くんがいつもお世話になっています。」

「いきなり何言ってんだよ。あはは。」
と、友喜が笑いながら言った。

「だって……。こういうのって、なんて言っていいか分かんないんだもん!!」
千夏は照れながら言った。

「あはは。面白い子だね。君が例の転校生??」

「え?!あ、はい!!」
千夏は驚いた様に言った。

「君の噂は、友喜からよく聞いてるよ。何やら、独り言が趣味のようで。」
みのるは、笑いを我慢した様子で言った。

「ちょっと!!何言ってるのよ!!」
と、友喜の肩をパンっと叩き、

「違います違います!!アタシは、ごく普通の高校生です!!」
と、言いなおした。

「何照れてんだよ。本当の事だろ。分かっているよ。隠さなくていいんだよ。」
と冗談めかしながら、千夏の肩にポンと手をやり答えた。

「あはは。そうだよ千夏ちゃん。」
みのるは笑いながら同意した。

「もう！！ちょっと！！実君が、本当に勘違いしちゃうでしょ！！」
と、顔面を真っ赤に染めた千夏が、友喜の胸の辺りを叩きながら言った。

「あはは。わかったわかった。ごめんごめん。」
友喜は笑いながら謝った。

みのるはずっと笑っていた。

「友喜なんて大嫌いだもん！！」
と、泣き真似をしながら言った。

「ほおら、友喜。女の子泣かしちゃダメなんだぞ。」
と、みのるは千夏をかばう様に言った。

「わかったよ。悪かった。ごめんよ。」
と、しぶしぶ謝った。

「分かればよろしい。」
と、ニッコリと笑みを浮かべ千夏は友喜に答えた。

「明日から、千夏もここに来るみたいだから、よろしくな。」

と、友喜がみのるに言った。

「千夏ちゃんまで巻き込んじゃうのか。なんか悪いな。」

「いいのいいの。一緒に頑張ろうね。実君。」

そういいながら、千夏は友喜の顔を見た。

友喜は、そっと頷いた。

そうして、千夏の自己紹介は終わった。

6　温もり

次の日も、その次の日もきちんと千夏はみのるの家へと着いて来た。
そんなある日、

「おはよう実。」

「おはよう実君。」

2人は、みのるに話し掛けた。

「ああ。おはよう。本当に毎朝すまないね。」

「いいんだ。お前はそんなことより、自分の事を心配するんだ。」
友喜はみのるに心配しながら言った。

「そうだよ。一日でも早く、学校に行けるようにならなきゃ。」
千夏も続けた。

「そうだね。でも、俺は気持ちの上で、決着が付かないと、学校へは行けないよ。」

「そうか。」

「そうか。」
千夏は、友喜の真似をしながら言った。
そんな千夏を、友喜は心から可愛いと思った。

「お前。真似するなよな。」
内心、友喜は照れながら言った。
「いいじゃないか。悪いのか??」
またも、千夏は友喜の口調を真似して言った。
「あはは。日に日に仲良くなって行くなあ。」
みのるは笑いながら言った。
「仲良くなんてなってねえよ。」
友喜は照れながら言った。
「ええー。仲良くなってると思ったのにー。」
千夏は、顔をへの字に歪ませながら言った。
その顔も、とても可愛かった。
「ああ……。嘘だ。とても仲良しになってるよ。」
にやけそうになる顔を抑えつつ言った。
「でしょお!!もお。照れちゃって。」
千夏は、ニコニコと笑顔で言った。
友喜は抱きしめたくなった。
だが、それはもちろん出来なかった。
「おー。お暑いですね。そんなことより、時計を見た方がいいかもしれないよ。」
と、みのるが言った。

友喜は腕時計を見ながら、
「ああ！！千夏！！急がないと遅刻するぞ！！」
と言った。
「ええ！！急がなきゃ。じゃあね実くん！！また明日！！」
「お前……。実を学校に誘う気があるのか？？」
「ああ。そうだった。あはは。」
「あはは。じゃねえよ。……実。来ないのか？？」
友喜はみのるに話しをふった。
「ごめん。まだダメだよ。」
「わかった。じゃあまた明日来る。明日は頑張ろう。」
「行けるように頑張るよ。ありがとう。」
そう言ったみのるを家に残し、友喜と千夏は家を出た。
「ほら千夏！！乗れ！！」
そう言って、自転車の後ろを指差した。
「ええ！！アタシこういうのしたこと無いよ。」
千夏は戸惑っていた。
「いいから乗れ！！ここに乗るだけだ。」

「わかった。」
そう言って、千夏は自転車の後ろに乗った。
「いくぞ。」
「うん。」
友喜は自転車をこぎ始めた。
「ちょっと……。は……早い！！怖い！！」
「心配するな！！俺に捕まってろ！！」
そう言って、友喜は千夏の手を自分の腰に回させた。
自転車の振動で、千夏はお尻を何度も打った。
「いたっ！！ちょっとお！！安全運転してよね！！」
「そんな事言ってる場合か。遅れるぞ。」
「もう！！……いたっ！！」
”背中に千夏の温もりが……。もう……。心臓が破裂しそうだ。”
友喜はそう思っていた。
「ちょっとお！！何か変なこと考えてない？！」
「断じて考えてない！！」
”考えてます。ごめんなさい。”
「ならいいんだけど。……いたっ。」

そうして、学校へと着いた。
教室には、チャイムが鳴る前ギリギリに着いた。
「まに……あったな。」
友喜は肩で息をしながら言った。
「まあ。なかなかのタイムね。」
千夏は偉そうに言った。
「ったく。お前は。」
「あはは。嘘嘘。ありがとう。お尻は痛かったけどね。」
「ごめんな。」
「いいよ。またしようね。」
「いや……。きついよ。朝から。色々と。」
「色々とって??」
「こっちの話だ。」
そうして、その日も一日無事に終わった。
次の日、みのるの家から学校へ向かっている途中に、千夏が話しかけてきた。
「あっ。今日は筆を買いに行きたいな。」

という事で、放課後に行く事になった。
待ち合わせ場所は、いつも絵を描いている川原になった。

放課後、約束通り千夏と画筆を買いに『イマガワ画材屋』へと向かった。
そこで水彩画に必要な道具を、一通り千夏に説明をし、一式買った。

その帰り道で友喜はある事を考えていた。

”告白……。してしまおうかな……。”

”いや……。でもまだ話始めて間もないし……。早いよな……。”
”ああ……。でも、もう想いが膨らみすぎて破裂しそうなんだよ。”
”こうなれば……。ダメ元で……。当たって砕けろ！！”

意を決して友喜は話始めた。
「なぁ。」

「ん？なに？」

「千夏が嫌じゃなかったらさ。」

「何よ？」

”俺と付き合ってくれないか？？……言えない……。頑張れ……俺！！”
「あのアパートが完成したら一緒に住まないか？」

”だあああ！！遠まわしに言ってしまった。気付いてくれるかな？？”

千夏は一瞬”え？！”という顔をした。
それは、嫌がっている姿にも見えた。

「それって……さ。付き合おうってこ……と……？」

「まぁそうなるな。」
”ああ。こりゃもうダメかな。でも、友達でいれるように頑張ろう。”

千夏は、一時考えた後そっと口を開いた。
「まぁ…。うん。いいよ。」
”え？！いいのか？！よっしゃあああ！！！！！！”
「そうか。よかった。ありがとう。」

「うん。」

早すぎたと思った告白は見事に成功した。
友喜は、良い答えが返ってくると思っていなかったので、飛び跳ねて喜びたい気分になった。
しかし、そんな姿を見せてはならないと思い、静かに心の中で拳を握り喜んだ。

7　変化

次の日から、二人の交際はスタートした。
かと言って、何も特別な事をしていたわけではなかった。
いつもの様に、朝二人でみのるの家へ向かい、放課後一緒に絵を描くという生活だった。
しかし友喜はそれでも良かった。
二人で一緒にいれること、隣に千夏がいること。それだけで幸せだった。
ただ一つ望があった。

”そろそろ……。あれだ……。あれを……。”

あれとは、あれだ。
そう思いながら、今日も放課後二人で絵を描いていた。

「なあ千夏。」

「なに??」
千夏は、絵を描いている手を止めた。

「あの……。なんだ……。その……。」

「何よ。」
千夏は笑顔で答えた。
「その……あれだ。いや……なんでもない。」
「あはは。何が言いたいの??言いたい事は、はっきり言いなさい。」
「いや……、今はいいよ。」
「今日の友喜は変わってるね。相も変わらず、秘密主義だね。」
「そうだ。」
「もう。」
そして、二人はまた絵を描き始めた。
そのまま日は暮れた。
友喜は、家の前まで千夏を送った。
「じゃあな。」
そう言うと、友喜はすぐに家に帰ろうとした。
「あ。友喜。」
千夏に呼びとめられた友喜は、フと振り返った。
その瞬間、唇に柔らかい感触を感じた。
千夏の髪から、甘い香りがふわっと流れてきた。

友喜は一瞬時が止まったかの様に感じた。
背伸びをしている千夏が、とても愛らしく感じた。
その柔らかい感触は、少しずつ離れて行った。
「じゃあね。秘密主義くん。」
「……おう。」
そう言って、千夏は駆け足で家の中へと消えて行った。
友喜は、目を見開いたままその場に立ち尽くしてした。
”馬鹿野郎。秘密になってないじゃねえか。……ありがとう。”
そう思いながら、友喜もゆっくりと家へと帰った。
それからは、別れ際に毎回の様にキスを交わした。
そんな生活が半年近く続いた。

そんなある日の朝。
「実。おはよう。」
「みのるんおはよう。」
「なんだよ、『みのるん』って。」
友喜は、笑みを浮かべながら千夏に聞いた。
「実くんに決まってるじゃない。」

”わかってるよ。”
そう思いながら、みのるの返事を待った。
「ああ。おはよう。」
やっとみのるが返事をした。
「おう。どうした??体調でも悪いのか??」
心配した友喜が言った。
「いや。大丈夫だよ。」
「そうか。あ。これ今日の絵だ。」
そう言って、一枚の絵をドアの下の隙間から入れた。
するとみのるから、一枚の折りたたまれた紙が返ってきた。
そこには、『友喜が一人の時に読んでくれ。』と、書いてあった。
その事に、千夏は気付いていなかった。
友喜はその紙を、そっとポケットに入れた。
「実くん今日も来れないの??」
と、千夏がみのるに聞いた。
「うん。そうだな。まだ無理そうだよ。」
「そうか。体調管理には気を付けろよ。」
友喜は言った。
「分かってるよ。じゃあ今日はこの辺で。」

「おう。じゃあまたな。」
「おう。じゃあまたな。」
千夏も真似して言った。
友喜は”また、お前は……。”と、いう顔をしながらその場を後にした。
友喜は学校に着いてから、今朝みのるに渡された紙を見る事にした。
そこにこう書いてあった。

『まだ詳しい事は言えない。
でも、やばい事になってきた。
俺は命を狙われてる。
この部屋は盗聴されているかもしれない。
会話は、お前の絵の裏と、俺のこの紙でする。
俺がこの紙を渡す時の合図は、俺が「今日の天気は??」と、聞いた時だ。』

と、書いてあった。
友喜は、自分の目を疑った。
”何で実が狙われているんだ??盗聴??一体どうなってるんだ??”
そう思いながら、その紙をまたポケットの中にしまった。
”俺の知らない所で、何が起きているんだ??”
そう、友喜は思った。

その日の放課後も、絵を書いた。
そして家に帰ってから、みのるの手紙を書いた。
もちろん、絵の裏に。

『どういうことだ??誰に命を狙われているんだ??
俺に出来ることがあれば、何でもする。
言ってくれ。』

と書き、次の日に備えた。

次の日の朝、

「おはよう。」

「実くんおはよう。」

二人は、みのるの家にいつもの様に着いた。

「おはよう。あ、友喜。今日の天気は??」
と、みのるが合図を出した。

友喜の顔付きが変わった。
だが、千夏に気付かれてしまわぬように、すぐに元の顔に戻した。

「えー。実くん、カーテン閉めてるの??」
千夏は、心配そうに言った。

「そうなんだ。俺はいつもカーテンを閉めて生活してるんだ。」

「そっかあ。健康に悪いよ。いつも開けてなさい。」
「あはは。そうだね。いつか開けるよ。」
「もお。」
千夏は、頬をプクっと膨らませた。
「まあ、カーテンくらいいいじゃないか。今日は晴れだ。実。
あ、それと今日の絵だ。」
そう言って、ドアの下の隙間から絵を入れた。
それと同時に、みのるからの手紙が返ってきた。
「そっか。晴れか。おっ、今日も上手いね。友喜。」
「本当に、友喜は上手いよね。でもでも、アタシもそのうち、友喜より上手くなるんだから!!」
千夏は、友喜を見ながら言った。
「お前には、抜かせないさ。」
友喜は笑顔で答えた。
そして、ポケットの中にそっと手紙を入れた。
「また友喜はそんな事言うー!!すねちゃうよ!!ぐれちゃうよ!!」
千夏はまた、頬を膨らませながら言った。
「あはは。嘘だ、嘘。いつか、俺と千夏で店持つんだもんな。」
友喜は笑いながら言った。

「おお。そうなのか。」
みのるは驚いた様に言った。

「そうなんだ。この間、友喜と約束したの。」
千夏は言った。

この約束は、二人で絵を描きながらしたものだった。
将来について、話している時に、友喜が思いつきで言った。
それを、きちんと友喜は覚えていた。

「実。その時は、従業員として雇ってやるぞ。」
友喜は冗談めかして言った。

「そりゃ助かるよ。頼んだよお二人さん。」
みのるも笑いながら答えた。

「まかせなさい！！あっ！！友喜時間だよ！！」
千夏は自信満々に答え、時間を指摘した。

「そうだな。そろそろ行こうか。じゃあ行ってくる。」
友喜は答えた。

「え？？今日は誘わないの？？」
千夏は友喜にたずねた。

「今日はいいんだ。」

「何それ。まあいいや。行ってきます！！」
千夏は、深くは考えず答えた。

「行ってらっしゃい。」
みのるも笑顔で答えた。

学校に着き、友喜はみのるからの手紙を取り出した。
そして、一人でその手紙を読み始めた。

『昨日はいきなりすまない。千夏ちゃんにばれていない事を祈るよ。
昨日の続きだが、友喜も千夏ちゃんも危ないかもしれない。
夜の道なんかは、気を付けてほしい。
夜は、絶対俺の家に来ないでくれ。』

そう書いてあった。
”一体誰が何のために、実や俺達を狙ってるんだ……。”
そう思った。

8　第一号店

そして次の日も、いつもの様にみのるの家へと向かった。
友喜は、”今日も何かがあるはずだ。”
そう思っていた。

「おはよう。」

「おようございますですよお！！」
何も知らない千夏は、元気良く言った。

「ああ。おはよう。」
みのるが答えた。

「実くん。今日も晴れだよ。」
みのるが言う前に、千夏が言ってしまった。

「お前！！」
友喜はつい、千夏をどなろうとしてしまった。

千夏は”え？？”と、不安そうな顔をした。

友喜は気を落ち着かせて、
「お前、今日は晴れ時々曇りだぞ。ちゃんとニュースを見なさい。」
と、言った。

千夏は、”なーんだ。”という顔をして、

「いいじゃない。そんな細かいことを、気にする人間だったかしら??」
と、冗談めかして言った。
「いや。全く気にしない人間だ。」
と、友喜も冗談めかして答えた。
「そうか。今日は、晴れ時々曇りなんだ。」
みのるも普通に答えた。

「ああ。実。これ、今日の絵だ。」
友喜は、”今日の絵”の裏には、今回何も書いていなかった。
すると、やはり同時に紙を渡してきた。
友喜は静かにポケットの中に、その紙を入れ、話を続けた。

「うちの学校は、学年は一応上がるけど、留年はするってスタイルだ。
わかってるよな??」
「ああ。わかってる。」
「お前、そろそろ本当に来ないと、学年は一緒でも、一浪決定だぞ。」
「ああ。そうだな。」
「へえ。うちの学校ってそういうシステムだったんだ。」

千夏は感心しながら言った。

「そうだ。」
友喜は続けた。

「留年しちまったら、一緒に卒業できなくなるから、気持ちを落ち着かせたら、一緒に行こうな。」

「わかった。ありがとう。」
みのるは答えた。

「それじゃ今日はこの辺で。」

「そうだね。行って来るね。」
千夏も答えた。

「ああ。行ってらっしゃい。」

そう言って、二人は学校へ向かった。

友喜はいつもの様に、一人になってから手紙を開いた。
そこには、

『すまない。友喜。俺の勘違いだったかもしれない。
だから、昨日までの事は忘れてくれ。』

と、書かれていた。

”なんだ勘違いだったのか。”
と、安心したような、どこか不安の残っている様な顔をした。

それから、何事もなく半年が過ぎ友喜は3年生になった。
先生から、クラスのメンバーが書かれた表を手渡された。
そこには、『近藤千夏』の名前があった。
友喜はまた、千夏と同じクラスになれたのだ。
”よかった。”
と、心で喜び、顔には出さなかった。
新しいクラスでの挨拶も終わり、千夏と二人で下校していた。
「また一緒のクラスだったな。」
友喜は、千夏に言った。
「そうだね。よかった。これでまたずっと一緒にいれるね。」
友喜は、”心臓が破裂しそうになるような事いうなよ……。”と思いながら、
「そうだな。」
と、一言で返した。
「なによー。友喜は嬉しくないのー??」
と、千夏は少し寂しそうな顔をして言った。
「……。」
友喜は沈黙をした。
千夏は、不安そうな顔をした。

「冗談だよ。嬉しいに決まってるだろ。」
と、千夏の顔を覗き込みながら、笑顔で言った。

「もおーーーー！！！！本気で不安になったじゃん！！馬鹿！！アホ！！ドジ！！間抜け！！」
と、ポンポンと、友喜の肩を叩きながら千夏は言った。

「おいおい。言いすぎだ。」
友喜は、千夏をなだめながら言った。

「アタシを騙したバツだあ！！！」
そう言って、千夏は更に友喜を叩いた。

「あはは。ごめんごめん。許してくれ。」
友喜は笑いながら、その後も千夏をなだめた。

そんなある日、友喜は絵を描きながら思っていた。
”今度、路上で絵を売ってみよう。千夏の絵もかなり上手くなって来たし。千夏の絵も一緒に出して大丈夫だろう。”

そして、その事を千夏に告げた。
千夏は、しぶしぶだがその話を受けた。
町の方へ絵を売りに行くのは、土曜になった。

土曜は朝から町へと出かけた。
適当な場所を見つけ、そこに店を構えた。
小さかったが、それでも二人は満足だった。

絵を並べ終わった友喜は言った。
「よし。第一号店の完成だ。」

「第一号店??」

「そうだ。将来もう一件建てる予定があるからな。こっちは第一号店だ。」

「えー。もっと可愛い名前にしようよ。」

「いいんだ。名前で客が来ても、仕方がないからな。」

「そうだけど……。」
千夏はしぶしぶ了解した。

絵は売れることなく、時間だけが過ぎて行った。
そろそろ店を閉めようと、友喜が思った時、客が来た。

その客は、サラリーマン風な男だった。
友喜は、そのサラリーマンをどこかで見た事がある気がしていた。

一時、そのサラリーマンと会話をした。
そして、そのサラリーマンは、
「これ一枚もらおうかな?」
と、言って友喜の絵を手に言った。

とても、絵を分かっているサラリーマンだった。
一目で、友喜と千夏の絵を見分け、水彩画の特徴や、自分の特徴などを言い当ててきた。
不思議に思ったが、”とても絵が好きな人なんだろう。”と、友喜は自分の中で解決した。
３００円だった絵は、１０００円という高額な値段に化けた。
それは、そのサラリーマンが１０００円を出し、『おつりはいらない』と、言ってくれたからだった。
その１０００円で、その日の夕食を食べて、家へと帰った。
家に着いたあと、そのサラリーマンの事が少し気になり、少し心当たりを探してみることにした。
探し当てるのには、時間はそうかからなかった。
堂々と載っていたのである。
『福岡美術大学』のパンフレットに。
「そうか。あいつは、大学の先生だったのか……。」
友喜は少し考えた。考えた結果、
「自分をアピールしとけば良かった！！！！」
と、少し後悔をした。
そして、”この事は、千夏に黙っておこう。大学の先生に売れたな

んて言うの恥ずかしいしな。”と、思った。

最終話　伝えたい想い

ある日、友喜は父から呼び出された。

「お前、進路はどうするんだ??」

と、父は言ってきた。

「福岡の美術大学へ行く。」

「お前まだそんなつまらない事を言っていたのか?!」

「……つまらない事だと??」

「そうだ。絵を描いて生活できると思ってるのか?!」

「……。」

「本当。お前はつまらない所だけ、母親に似てしまったな。」

「母さんを悪いように言うな!!!!」

思わず怒鳴ってしまった。

「お前は、誰に向かってそんな口を聞いているんだ!!」

「お前だよ!!だいたい、お前がそんなんだから、母さんが出て言ったんだろ!!」

「……お前だと??貴様、親をなめてるのか?!」
父は、友喜を思いっきり殴った。
その勢いで、友喜は壁にぶつかり倒れこんだ。
口が少し切れて、血が出て来た。
それを手でぬぐいながら、
「いって……。そうやって、母さんも出て言ったんだろ。いや……。お前が追い出したんだ。」
「分かったような事を言うな!!」
友喜は、立ち上がりながら言った。
「じゃあ何で!!何で母さんが出て行ったんだよ!!」
「……。」
「お前は、いつも自分の話が通らないと大声出して。楽だったろうよ。だけどな、こっちはそれに耐えて来たんだぞ。」
父は何も言わなかった。
「俺はもう決めたんだ。お前がそれでも拒むなら、俺はお前との縁を切る。」
「……そうか。好きにしろ。」
そう言って、友喜の父は自分の寝室へと向かった。
友喜は、自分の部屋に帰り怒りを沈めていた。

そして、月曜が来た。
その日朝起きると、机の上に手紙と通帳が置いてあった。
友喜は手紙を広げた。
それは父からの手紙だった。

『友喜。
昨日はすまなかった。こんな紙切れでしか、友喜と対等に話せない私を許してくれ。
……もはや対等ですらないかもしれんな。
昨日は、怒鳴ったりしてすまなかった。
私がああ言ったのには、訳があったんだ。
私は昔、絵を売って生活していたんだ。』

その文を読んで驚いた。
”あの親父が絵を?!”

友喜は、読むのを続けた。

『しかし、生活はかなり厳しいものだった。
現実を見せられたよ。
お前も知ってる様に、母さんも絵を描いていた。
それは、私が教えたんだ。
私が、絵を売るのを辞めたのはお前が小学生に上がる前だ。
その時からだろうか。
母さんとの関係が悪くなったのは。
私が、毎日のように夢を奪われたような顔をしていたみたいなんだ。
会話もろくにせずに、時間だけが過ぎて行っていたよ。
それで、その事に愛想をつかせて母さんは出て行ったんだ。

母さんはもちろん、友喜を引き取ると言ったよ。
しかし、それだけは辞めてくれと私も必死に頼んだ。
結局裁判になったんだ。
その時、私も職があって、安定もしていたから、親権は私が獲た。
だから、今もお前がここにいる。
昨日、あの後母さんに連絡したよ。
今日、家に来るそうだ。
その時、友喜の口から言いなさい。
福岡の美術大学に行きたいと。
私はもう、反対はしない。
昨日本当は、友喜の意思を確かめたかっただけなんだ。
許してくれ。
通帳を一緒に置いておくよ。大学の費用にしなさい。』

父からの手紙を読み終えた友喜は、通帳を開いた。
そこには、見た事も無い額が書いてあった。

友喜は、無意識に涙を流していた。
”親父……。ごめん。ありがとう。”

そう思った。そして、今晩にでも父に謝ろうと思った。

そして、友喜はみのるの家へと向かい、いつもの様に話をして、学校へ向かった。

学校でちょうど、進路の話になった。
そして友喜は、その進路の紙を見ながら思っていた。
”福岡か……。千夏とは離れ離れになるな……。”
”あいつは許してくれるだろうか。”

そしてその日の放課後、いつもの様に川原で絵を描いていた。

「友喜、進路どうするの？」

千夏が聞いてきた。

「……。」

”素直に伝えないと……。”

「何か今日、じっと進路表見ながら考え事してたね。」

「……。」

「どうしたの？」

千夏が不安そうに、見つめてきた。

”いつかは伝えなきゃいけないんだ。言おう。”

「俺……。」

「ん？」

「福岡の芸術大学を受けようと思ってるんだ。」

「……え？」

千夏は戸惑ったような顔をした。

「ずっと行きたかったんだ。福岡の芸大。」

千夏からの反応はなかった。

友喜は続けた。

”でも…”
「でもお前を残して、一人ではいけない。」
思っていたことが、口から出てきた。
「え。いや。ダメだよ！行きたいんなら行かなきゃ！！」
”でも……、そしたらお前が一人になる……。”
「……。」
「アタシの為に諦めるなんて許さないよ！！」
「……。でも千夏とは、一緒にアパートに住むって約束だし。」
「それは……。でもそんなの、友喜が大学を卒業してからでいい！！」
「……そうか。」
「だから、友喜は行きたい大学へ行って！」
「分かった。ありがとう。」
”本当に……。ありがとう……。”
そして、その後一時一緒に絵を書いて、お互いの家へと帰った。
空は少し暗くなっていた。
家に帰ると、そこには見慣れない女性物の靴があった。

”母さん？！”

そう思った友喜は、急いで居間へと向かった。
居間に入ると、そこには友喜の母がいた。

「母さん！！」

「あら。友くん。元気にしてた？？」

「うん！！母さんは？？」

「元気だったよ。ちょうど今、お父さんが買い物に行った所よ。」

「すれ違わなかったな。」

「そうなの？？今日は、お父さんが腕をふるって、鍋を作ってくれるみたいよ。」

「そっか。久しぶりだね。三人で食べるご飯。」

「そうね。」

友喜は、”あっ。進路。……親父が帰って来てからにしよう。”と思い、進路の話はまだしなかった。

「あ！！俺ちょっとしなきゃいけない事があるんだ！！話は、またご飯食べながらしよう！！」

「いいわよ。じゃあご飯の時にね。」

そして、思いついたように友喜は部屋に帰った。
”手紙を書こう。千夏と、実に。”
”前に、似顔絵描いたっけな??それも一緒に入れておこう。”
そう思い、二人分の手紙を書き始めた。
まず、千夏の方から書き始めた。
”えっと……。もう大学に入学している設定でいいや。”
友喜は、大学に入学している気分で文章を書いた。
『あっ。そうだ。俺の通う大学の名前を教えとく。
福岡美術大学だ。』
”よし。大学の名前も書いたし、後は……”
『それと、あ〜。』
”俺がこっちに帰って来てさ、店持ってさ、暮らしが安定してきたら……
俺と結婚してくれないか??”
と、書こうと思ったが、
”いやあ……。これは口で言おう。”
と思い、
『やっぱこれは、千夏と俺が再会した時に言うよ。
気にするな。』
と書き換えた。

そしてみのるの分の手紙を書き終え、その手紙をみのるに渡しに出かけた。

そして、みのるの家に着いた。

「おい実！！」

「……友喜か??」

「そうだけど??」

「何しに来たんだ！！夜はダメだって言っただろう！！」

「え……。すまない。でも渡したいものがあって。」

「……なんだ。」

「手紙だよ。これを、俺が大学に入学したら千夏に渡してくれ。」

「わかった。」

「もし、千夏が俺と同じ大学に進学したら、その手紙は捨てちゃっていいや。」

「わかった。」

「それと、これは実に。俺が、大学に入ってから読んでくれよ??」

「わかった。用が済んだのなら、急いで帰ってくれ。」

「何を焦ってるんだ??」

「いいから!!帰れ!!」

「……わかったよ。じゃあな。」

「ああ。気を付けて帰ってくれ。怒鳴ってすまなかった。」

「おう。」

そう言って、友喜はみのるの家を後にした。

その帰り道、

”何であいつ、あんなに怒ってたんだろう??”

と、思っていた。

すると、目の前に足を怪我した猫が”ニャーニャー”と声を出しながら、苦しんでいるのが目に入った。

友喜は自転車を降り、その猫を抱きかかえた。

「大丈夫か??お前足怪我してるじゃないか。今、病院に連れて行ってやるからな。」

そう言って立ち上がろうとしたとき、誰かに肩を”ドン”と、押された。

友喜は、”え??”と、思った。

次の瞬間、友喜の体は道路へと出ていた。

後ろから、クラクションが聞こえた。

振り返る間も無いくらいの時、

”ドン！！！！”という、大きな音と共に、友喜の体は宙に浮いていた。

走馬灯のように、流れる時間だった。

その一瞬、ライトにある人物が照らし出された。

”お前は……”

次の瞬間、友喜は地面へと転がり落ちた。

その時には、人影はなくなっていた。

自分が、”トラックにひかれた”と気付くのには時間がかかった。

遠くから、友喜の父の声がした気がした。

確かに父は、そこにいた。
買い物袋をぶら下げて。

買い物の帰りに、物音がして近づくと友喜だった。
走って駆けつけたのだった。

「友喜！！友喜！！」

”……やっぱり親父なのかな？？”

「しっかりしろ！！死ぬな！！」

”……死んだりなんてしねえよ……。”

「誰か！！救急車を！！！！」

”救急車？？大げさだな……。ちょっと引かれただけじゃねえか。”

「友喜！！！！死なないでくれ！！お願いだから、目を開けてくれ！！」

父は泣きながら、友喜に呼びかけた。

”ごめん……やっぱ……意識が遠くなってきたかも……。”

その後も、父は友喜に呼びかけ続けた。

”そういえば……、まだ謝ってなかったな……。……ごめんよ。おとう……さん……。俺……お父さんのこと大好きだよ……。”

”千夏……。ごめん……。一緒に店出せそうにないや……。……そうだ……よく聞けよ。……俺は……

お前のこと……この……よで……一番……あいし……てるぞ。聞こえ……てるか……??

これが……俺から……千夏に……送る……最後の……メッ……セージ……だ。”

”みのる……あとは……たのんだ……”

そこで、友喜の意識は途切れた。

その後、病院へと搬送されたが、手遅れだった。

人間は死後、二時間まで耳が聞こえるらしい。

その声が、脳に届いているのかはわからない。

しかし、友喜の目からは人知れず、涙が流れていた。

最終話　伝えたい想い（後書き）

最後まで読んでいただいて、本当にありがとうございました。
先に、前回の如く、誤字、脱字があった場合、申し訳ありませんでした。

普通の、ありふれた携帯小説として書き始めた『あたりまえの日常』を、普通の携帯小説じゃなくしようと思い、この話を書き始めました。
友喜の死に隠された真実は、次の～実のストーリー～で、明かしますので、またしばらくお待ちになられてください。
お付き合いいただき、まことにありがとうございました。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n4748d/

『伝えたい想い』～友喜のストーリー～

2010年10月10日22時28分発行